2017年9月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第488号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

青磁社　創業18年目―――///★///

今夏、４冊目となる全歌集
『永田和宏作品集Ⅰ』を刊行

文 / 青磁社代表　永田淳

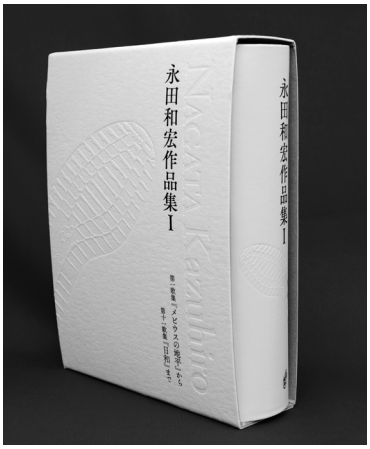
青磁社を興したのが二〇〇一年なので、創業してから十八年目のシーズンということになる。

刊行物のメインは詩歌集で、主に歌集、年に数冊の句集や評論集を出すといったスタイルで、この間におよそ五〇〇冊の書籍を刊行してきた。こういった短詩型の刊行物の大半－九割以上と言ってもいいだろう－は、私たち青磁社だけでなく同業他社も含めて、いわゆる自費出版である。表向きは自費出版と言わず、「共同企画出版」のごとき面妖なる出版形態を創り上げている版元もあるが、これも平たく言ってしまえば同じことである。

多くの著者が自身の、これまでの作品を制作年代順に、あるいはテーマごとに並べた原稿を持ち込んでくる。それに形を与えるのが主な仕事といえよう。そこに私たちの介在する余地はあまりに少ない。体裁を整え、誤字脱字を正し、装幀家にその一冊の意図を説明しながらどういった装幀にするかをディレクションする。

これら著者がもつ一番多い悩みは、タイトルをどのように付けるか。日々の出来事、旅のこと、時には社会・時事に関すること、あるいは家族のこと、恋人のことなど一冊の歌集や句集には非常に多岐にわたるテーマが混在していて、ひと言ではとても言い表せるしろものではない。動かしがたくバチッと決まるタイトルもあれば、なんとなく淡いタイトルになることも多い。

私自身が短歌を作り始めて三十年になるので、そういった面からアドバイスを請われることも多々ある。どちらのフレーズの方がいいか、どのように添削すればいいか、などの相談は茶飯事で、時には「悪いと思った歌はどんどん削ってしまってください」などといった突飛なお願いをされることすらある。さすがにそのようなことは鄭重にお断りするのであるが。



▲『永田和宏作品集Ⅰ』／Ａ５判上製函入・８２４ページ／定価７０００円（税別）／第１歌集『メビウスの地平』から第１１歌集『日和』までを完全収録、初句索引・年譜を付す。

ときにはすべての作品を持ち込んで、作品の取捨選択および構成まで任されることもある。こういった場合は、編集者ダマシイのようなものが沸々と頭をもたげ、労力はほかの歌集句集の倍以上かかるものの、やはりその一冊への愛着といったものは、かかった労力以上に湧くものでもある。

ともあれ、著者から費用をいただいて刊行している以上、著者の思惑を、意図を最大限尊重した本作りとなる。そのことが編集者として格下であるとも思っていないし、卑下することでももちろんないだろう。

ひょっとすると、紙ベースでの刊行物というのは、われわれのような詩歌集の自費出版物が最後までその孤塁をまもるのではないだろうか、と最近の加速度的な電子化の流れをみていると大袈裟でなく、本気で思ってしまう。

歌人・俳人の全貌が鳥瞰的に見渡せるのが全集の大きな魅力

青磁社ではこれまでに三冊の全歌集・全句集、すなわち『志垣澄幸全歌集』『岡部桂一郎全歌集』『魚目句集』（宇佐美魚目著）を出してきた。

個別の単行本ももちろん、見所もあれば、それぞれの作家のターニングポイントとなる一冊であったりと、魅力が詰まっているのだが、やはりこうした全集には華がある。『志垣澄幸全歌集』では、歌集としては初めての試みとして収録歌を検索できるようにデータの入ったＣＤを付録として付けた。また『岡部桂一郎全歌集』には未刊歌集『竹叢』を収録、この未刊歌集部分に対して読売文学賞が授与された。

そしてなによりその歌人・俳人の全貌が鳥瞰的に見渡せる、というのがこうした全集の大きな魅力といえよう。それぞれの作家の辿ってきた変遷、作品の変化、時代背景がどのように作品に影響を及ぼしたのか、志向あるいは思想の移ろい、深化などが全集として読み進めてみると如実に、手に取るようにわかる。

もしかすると、私たちは数年に一度訪れるこうした全集を出す好機、そのために出版をしているのではないか、そんな昂ぶりさえ覚えるのである。

そしてこの夏、青磁社としては四冊

目となる全歌集、『永田和宏作品集Ⅰ』を新たに刊行した。これは永田和宏の第一歌集『メビウスの地平』から第十一歌集『日和』までを完全収録したものである。

永田の短歌の出発は新仮名遣い（現代仮名遣い）であった。六十歳になったのを機に、永田は旧仮名遣い（歴史的仮名遣い）に表記を切り替えている。その区切りとなったのが歌集『日和』であり、そこまでをひとまとめにしたものが今回の作品集である。「Ⅰ」としてあるのは、この先ある程度歌集がたまればまた「Ⅱ」として出すためである。

世界の第一線の細胞生物学者としても知られる永田であるが、宮中歌会始を始め、朝日新聞全国版の歌壇選者を務めるなど歌壇での活躍もめざましい。

その永田の初期の歌集の何冊かは文庫化されているものの、現在では入手困難なものも多い。それらを今あらたに読めるということも大きな意義であろう。付け加えると、十一冊分の歌集が定価七〇〇〇円で読める、これは歌集一冊の平均単価が三〇〇〇円前後ということを考えればかなりリーズナブルでもある。

▲左奥『岡部桂一郎全歌集』右奥『志垣澄幸全歌集』手前『魚目句集』

第一歌集と第十一歌集のタイトルを比べてみても明らかなように、初期はかなり先鋭的であった作品世界が、徐々に平明になっていく、その過程も読みどころのひとつであると思っている。

また詳細な年譜、収録歌すべての初句索引も付す。栞には歌壇を代表する五人の歌人、馬場あき子、高野公彦、小池光、三枝昂之、大辻隆弘が推薦文を寄せる。

（ながた じゅん／青磁社代表永田淳）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『今日の漫画２　史群アル仙作品集』●史群アル仙著

別れて旅立つ彼女を頑張れと笑顔で送り出し、車中でと渡したおにぎりの包みに、「行かないでお願い」と書きつけをひそませる男。私が醜い姿の化け物だったとしても愛してくれるかという女、その姿をみて怯えて逃げ出す俺の姿を見ても愛してくれるかと答える男。もうだめお終いと泣き叫ぶ女を、大丈夫、僕が居るじゃないか、最悪な結果になった時、責め、行きどころの怒りを僕にぶつけるがいい、だから…、と抱きしめる男。頭をなでてくれた少年についていく野良犬、振り返った少年の暗い眼差しに射すくめられ、野良犬らしく薄汚れた闇の中に帰っていく。哀しくすれ違う愛のかたち、生きることに不器用な人たち。暗い話ばかりだけでない。時にユーモアや、救われる愛も。

見開きに、1ページマンガと、黒地に白の細い線で心象風景を描いた1点のクレパス画。生きることは切なく辛い。しかし暖かい命を信じ、大切にしなければと、静かに心に沁み込んでくる。

◆1080円・四六判・219頁・**ナナロク社**・東京・2017/6刊・ISBN9784904292723

『「日出づる国」の山と海 ― 大和・出雲・伊勢「東西」「天地」の信仰軸』●伊藤通子著

著者がまず、この国の文化と歴史の基層に据えるのは豊饒への祈りということであり、その豊饒をもたらす太陽への信仰である。そこから、日の出から日の入りに至る太陽の軌道を結ぶ東西の水平軸を神聖視する「東西信仰」という概念を提出する。この東西信仰を如実に顕しているのが、地図上で明らかになる出雲、大和、伊勢を結ぶ直線である。大和の王権は、大和から見て日に入りの方向である出雲の対極に位置し、日が昇る方角である伊勢の地に祖神としての太陽神を祀る必要があったのだ。もうひとつ、著者は「柱を立てる」この国の民俗に着目する。最も有名なのは諏訪大社の御柱祭であるが、「柱をたてる」文化は縄文の昔から連綿と続くものであることが考察されている。その根源にあるのは天地をつなぐ巨木への信仰である。巨木は豊饒をもたらす神々の依り代として機能し、また人々の天への祈りを届ける回路となる。本書ではこのような、水平軸と垂直軸をめぐる日本人の聖なる観念を座標として、様々な歴史や民俗を読み解いていくのである。

◆2052円・四六判・268頁・**サンライズ出版**・滋賀・2017/7刊・ISBN9784883256181

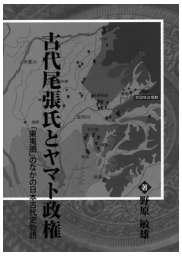
『ひとり　句集』●瀬戸内寂聴著

今年95歳を迎えた瀬戸内寂聴。高齢ゆえの身体の不調は否めないが、余命を愉しくしなければと思いめぐらすうちに突如「句集」という字が浮かぶ。著者と俳句との出会いは、初めての文芸書『田村俊子』を文藝春秋から出した頃にさかのぼる。当時の出版部長、車谷弘氏に俳句の会に誘われたのがきっかけだった。“御山のひとりに深き花の闇”“独りとはかくもすがしき雪こんこん”など、人間の孤独を表現した句が並ぶ。もちろん、それだけではなく、ボーヴォワールや司馬遼太郎を追悼した作品もあり、豊かな内容となっている。後半は吉屋信子や江國滋、鈴木真砂女など俳句にまつわる人物との交流や永遠の別れを綴った七編のエッセイを収録。

タイトルは“生ぜしもひとりなり　死するもひとりなり”という一遍上人の言葉に因んでおり、苦しい時や辛い時、愉しいことを見い出しては生き抜いてきた著者のエネルギーが伝わってくる。

◆2160円・四六判・133頁・**深夜叢書社**・東京・2017/5刊・ISBN9784880324395

『古代尾張氏とヤマト政権 ―「東夷圏」のなかの日本古代史物語』●野原敏雄著



昔から日本史上、4、5世紀は「空白の世紀」と言われてきた。同時代の文字史料がないからである。目覚ましい考古学成果の蓄積があるにせよ、今もそれは変わらない。この時期はヤマト王権に相当し、応神陵や仁徳陵などの巨大前方後円墳、あるいは「倭の五王」などがすぐに思い浮かぶ。天皇制を正当化するため潤色が加えられた『古事記』『日本書紀』からは歴史事実を読み解くことは容易ではない。著者は地方豪族・尾張氏を歴史の表舞台に引っ張り出して「記紀」の読み替えを試み、空白の世紀に大胆に切り込んでいく。とくに尾張氏の二人の女性に注目。一人はミヤス姫。ヤマトタケルとの婚姻は、朝鮮半島から伝来した鉄器や溜池灌漑技術の普及に、河川航行技術に優れた尾張海部氏が深くかかわった象徴だという。もう一人は目子姫。継体の妃で安閑・宣化を生んだが、応神系復活派の蘇我氏の逆襲に合い、継体＝尾張系の王統は断絶し欽明が即位。連系・尾張氏は没落する。

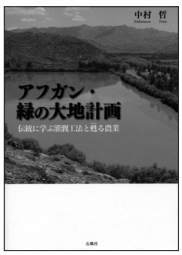
◆2700円・A5判・239頁・**愛知書房**・愛知・2017/5刊・ISBN9784900556591

『新劇製作者 ― 劇団青年座とともに』●水谷内助義著

40年の長きにわたり、日本国内はもとより、中国、ロシア、アメリカ、韓国など海外を含めて1300回を超える上演がなされ、いずれも大好評を博して、今も第5次公演が全国各地で行われている水上勉作の傑作舞台『ブンナよ、木からおりてこい』。その産みの親とも言え、椎名麟三をはじめ長年にわたって数々の作家・劇作家の作品の上演に携わり、「創作劇の青年座」とともに演劇現場の最前線を走り続ける名製作者の、知られざる思索・作業日誌。　著者は、演劇製作一筋50年。裏方とも言えるその場で味わった、だからこその苦難と喜び、失敗と成功、後悔と矜持、失望と希望、挫折と達成などの数々の思いを、独特の心地よいリズムで語り記す。いわば、演劇人だけではなく、生きるうえで不可欠な文化を担う次の世代全員への遺言とも言える貴重な刻印録である。　劇団青年座の社長も務め上げた著者は、長年にわたって日本新劇製作者協会の会長の任にあり、日本演劇協会専務理事も務める演劇界の重鎮でもある。

◆2700円・四六判・272頁・**一葉社**・東京・2017/9刊・ISBN9784871960656

『アフガン・緑の大地計画 ― 伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』●中村　哲著



30数年前、医師としてアフガン国境に赴任した著者は、現地の病気の大部分は清潔な水と十分な食糧があれば解決するとして、1600本の井戸を掘り、38か所のカレーズ（地下水路）を再生した。そして干ばつと洪水で荒廃・砂漠化した大地を甦らせるため、2002年「緑の大地計画」を開始。灌漑用水路25ｋｍを切り開き、3000haの農地を復活させ、現在、14000haの農地と帰還難民15万人を含む60万人に影響を与える。これら灌漑用水路工事で著者が特に留意するのは、現地の人々が現地に豊富な石材を使って低コストででき、自ら維持、修繕できる工法であった。河川からの困難な取水堰建設の工法は、江戸時代に九州の暴れ川・筑後川中流域に造られた山田堰から多くを学んだ。この章は本書の中心をなし圧巻だ。一連の工事費用30億円はすべて日本国内のカンパによる。巻末にアフガン復興支援について、著者らの地域重視型事業と、政府・援助機関主導事業との比較を行った永山謙二の学術論文が収載される。

◆2484円・A5判・231頁・**石風社**・福岡・2017/6刊・ISBN9784883442713

売行良好書

期間：2017年7月15日～8月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(2)『毒毒植物図鑑』1944円・南方新社　(3)『詩集　牢屋の鼠』2160円・書肆侃侃房　(4)『物語の森へ』3888円・東京子ども図書館　(5)『集団就職』2160円・弦書房　(6)『ときを紡ぐ（上）』1944円・小澤昔ばなし研究所　(7)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(8)『アフガン・緑の大地計画』2484円・石風社　(9)『トンボのすべて　新装改訂版』3024円・トンボ出版　(10)『アリの生態と分類』4860円・南方新社　(11)『「慰安婦」問題の境界を越えて』864円・寿郎社　(12)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(13)『未来ちゃん』2160円・ナナロク社　(14)『中国情報ハンドブック　２０１７年版』3240円・蒼蒼社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『本の雑誌　４１１号』720円・本の雑誌社　(2)『東京かわら版　８月号』500円・東京かわら版　(3)『日常学事始』1404円・本の雑誌社　(4)『昭和プロレスマガジン　４２』1000円・昭和プロレス研究室　(5)『ベスト１０本の雑誌』1620円・本の雑誌社　(6)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(7)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(8)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(9)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(10)『今日の漫画　２』1080円・ナナロク社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『夢をのみ』2160円・ツーワンライフ　(2)『詩集　牢屋の鼠』2160円・書肆侃侃房　(3)『アリの生態と分類』4860円・南方新社　(4)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(5)『「プーファ」フリーであなたはよみがえる！』1728円・鉱脈社　(6)『今川一族の家系』2500円・羽衣出版　(7)『空手研究』2160円・榕樹書林　(8)『シュルレアリスムと抒情による蜂起』3110円・エディションイレーヌ　(9)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(10)『集団就職』2160円・弦書房　(11)『旧鎌倉街道探索の旅２　中道・下道編』2700円・さきたま出版会

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼今年4月末に刊行された**ニコリ編・刊「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」**本体500円(ISBN978-4-89072-900-5)が話題となっています。高齢者からの注文が多くきています。数独とは、3×3のブロックを9個組み合わせた正方形の枠内にルールに従って1から9までの数字を入れるペンシルパズルです。日本では主に1980年代後半以降に愛好され、2005年、英紙タイムズの掲載を機に、世界で「数独ブーム」が起こりました。現在では、全世界140カ国で親しまれているとか。今回の出版は、東日本大震災に遭った大槌町の仮設住宅に住む高齢者のアドバイス・ヒントによって生まれました。同地で仮設住宅に住む高齢者の自立支援に取り組む、NPO法人ソーシャルハーツ代表の川上誠さんが高齢者に数独、その他のパズルを勧めたところ、笑顔が増えていったそうです。そこから生まれた本書は一般社団法人日本数独協会監修のもと、高齢者の認知症一次予防および生涯学習を目的とした数独問題集になっています。11月には第2弾が出る予定。また、数独協会はこの大槌町で第1回「数独技能認定試験」を実施することにしたそうです。実施日は9×9のマスにちなんで9月9日。毎年開催し、大槌町を「数独の聖地に」と構想しているようです。

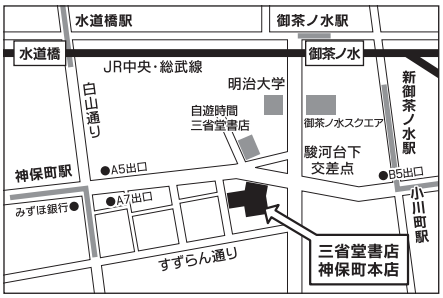
郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。